

Title	蝸牛考(柳田國男著, 刀江書院發行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.165(521)- 167(523)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れを細別して一一参考文献書を引用し、古文書學に於て説述せらるべき諸要點は殆んど記述し書かれてあると云ふべきである。

本書讀了後余は、其の説述等に於て聊か愚考あるも、本書の學界に多大の裨益を與ふるものなるは毫も疑ふ事なく、近來の良書の一として敢て江湖に薦奨するものである。

最後に、余は故著者の靈に合掌再拜して其の冥福を祈るに共に、この上梓に際して補修の任にあたられし故人の學友徳重淺吉學士の友情に敬謝の意を表せざるを得ないのである。(昭和五、九、六、武田勝藏)

湖州思溪圓覺禪院雕藏經律論

等目錄卷上下 (水原堯榮複製)

野山隨一の學僧たる水原堯榮師は、曩に山中に於て發見の湖州思溪圓覺禪院雕藏經律論等目錄卷上下一冊を、今次コロタイプに複製の上、頒布せられた。本書はその書風より見て、南宋期の刻板に屬するものと思考せられ頗る稀有なるは云ふ迄も無く、藏經研究者の渴望するものである。本書の書誌學上の研究考證は、これに附せられたる内藤湖南翁の跋語に盡されて居れば、その全文を、左に轉載して置く。

宋世、藏經之刻西蜀爲最先、閩刻兩藏亦起于北宋間、又有浙思溪刻本亦兩藏、一爲湖州思溪圓覺禪院所雕、即密州觀察使致仕王永從夫妻兄弟發心、捐財鏤板、五百五拾函、五千四百八十卷、有紹興二年題記、此前思溪藏、蓋經始于北宋末而成于南渡之初

也、二爲安吉州思溪資福禪寺所刊、凡五千七百四十卷、蓋在嘉熙淳祐間、此後思溪藏、王忠愍國維疑資福藏、即就王氏所刊、加以增補、未必別有一藏也、按宋湖州吳興郡、寶慶元年、更名安吉州、而資福藏所題年號、未見先寶慶者、則忠愍所考似可信矣、昭利法實總目止收資福藏目、未及圓覺藏目、野山親王院堯榮僧正檢山中古經、獲圓覺藏目二卷見示、書法學黃涪翁、桓公匡合之匡、避藝祖諱作輔、仍是宋時刊本、其函號卷數與昭利法實總目所載積砂延聖藏全合、而比資福藏、少五十一函、阜徵等數函沿革之故、若小野君玄妙等詳審商榷焉、堯榮僧正欲圖景印刊布、平安便利堂主人田中君慨然捐資任之、及于告成、見徵跋語、援筆書之、

猶ほ、天保二年、山僧がこれを發見の際に、附記せし左の奥書中、藏板種類の數字は注意すべきものであらう。

天保二年十二月索之、以納當院經庫、於中華一切之板有一十四箇、或二十又四ヶ、今是其一也、

終に、水原師の多年の研究に敬意を表し、更に今後、益々未知の學林を探踏して埋藏の寶庫を開發せられむ事を切望して止まない。(昭和五、九、三、武田勝藏)

蝸牛考

(柳田國男著 刀江書院發行)

最近日本の人文科學が長足の進歩を遂げたこと云ひながら少くも歐羅巴のそれと比べて遙かに下位に立てるは言語に關する諸研

究である。言語學の必要に缺くべからざる方言の研究が今日まで忽諸に附せられしは、昭代の恨事と云はねばならぬ。いはんや此日本語の歴史を闡明する材料たる貴重な過去の遺産は、教育の普及、標準語の採用と共に刻一刻消滅しつつあるにおいておやである。柳田國男氏は、早くから方言の研究に關心され、最近方言研究の擡頭と共にその勢を助長支持されんがため新村藤岡博士に計り、此處に「言語誌叢刊」なる叢書を公刊された。氏の「蝸牛考」はその一篇であり、先に人類學雜誌に連載發表されしものをまた全部書き改められたものである。

著者は、カタツムリの方言に普通三大別があり、その中デンデンムシが京都を中心として廣大な地域に擴り、これに反し他の稱呼にこれだけ廣い領域の連續が認められず、また他の異名その連續を食ひやぶるものなきをもつて之を最も新しきものとし、蝸牛をみて殻から出よと出よとはやしたてる童詞よりデエデムシといふ新名詞が發生し、後口拍子にあふ所からデンデンムシとなつた。氏の意見によれば命名の動機に意匠あり、聴くものをして容易に觀察の奇抜と表現の技巧を承諾せしめるものが語彙中にさりいれられる。その作者は個人にあらず、一つの群にあり、特に小兒は有力なる新語製作者であつたとする。

第二にマイマイツプロは、分布豊富ならざるも異なりし方言中に圍まれ、分散してをる所より、之がかつて弘く行はれてをり、有力なる語の侵入により勢力を奪はれしものなること、その命名の動機忘れられ、語言轉訛せし傾向ある所からその行はれてゐた時間長きことを示す論じ、その語が、複合形であり、マイマイ

は蝸牛の貝形渦紋あるより出で後に「舞舞ひ」といふ神人と聯想されしこと等を豊富な資料を引用して論ぜられてをる。

第三に前二者より古きものであり、マイマイの語分布領域より更に外に分散するカタツムリについて述べ、カタさいふさカサといふ二種あり、後者は古への笠が一筋の縫糸を螺旋させて縫ふたものであつたよりいでしかさいひ、ツプロ・ツブリ同じく形狀より出でしものであり、單にその形圓きのみならず、太い繩か粘土を螺旋狀に巻いてつくつた中空の圓筒形なものに似たるよりいでたりとする。最後に日本の東北と西南部に相似たる語の存することを説き、中央の都府より新語起り、四方に傳播し、古語はその影響の比較的弱き所に殘存する。カタツブリよりなほ古き語ミナ、シタダミ其他が存せし痕跡を邊土の方言によつて指摘し、方言の地方差は大體に古語退縮の過程を表示すると論じてをられる。

氏の研究を讀みつゝ今更ながら、その該博なる智識に驚嘆する。そしておびたゞしき材料を驅使するその直觀推理の力の鋭さに舌を捲かざるを得ない。兒童の心理を理解し、田園の村夫の生活に親しみを有し、同情同感すること氏の如き人に非ざれば、到底かゝる微妙な言葉の變化は洞察せられまい。民俗學者として命名ある氏は、今やこの方言學界なる處女地を開拓し、獨自の境界を開き、天馬空を行くの概がある。自分は本書を最近言語學界の最大收穫の一つとして奨賞するに憚らぬ。

この書の外に「言語誌叢刊」は故三矢重松著「莊内語及語釋」氏家剛太夫著「莊内方言攷」堀季雄著「濱萩」山口麻太郎著「壹岐島方言集」、東條操編「南島方言資料」を公刊した。吾人は、この叢書が、

將來續々方言學上の勞作を出版し、斯學に貢獻せんことを望む。然し評者をして忌憚なく云はしむれば現在の日本の方言學にまじり必要なるは發表機關よりも寧ろ撓まず倦まず此研究を育て勵ましゆく中央機關の樹立である。由來日本人は熱し易く覺めやすい。方言採集の事業も一時盛んにして中途に挫折せんことを恐れる。政府の僅かな補助金により、ソルボンヌ高等研究院の片隅で倦む所なくこつ／＼勵精し遂に不朽の「フランス言語地圖」を完成し言語學界に一時機を劃したジリエロンの如く、日本にも椽の下の力持ちになる覺悟で持久的にこの運動を支持すべき中心者の出現が望ましい。自分は、この「叢刊」の發起者たる三氏が進んで此任に當るべき人士であることを信じて疑はない。(松本信廣)

——蝸牛考を讀みつつ——

柳田國男先生の『蝸牛考』を讀んで居る中に、私共の使つて居る方言を思ひ出したので、それを少し認めてみた。(郷里は山形縣鶴岡市の商家、舊の莊内酒井侯城下)

蝸牛考 頁 方言

土籠 三 モグラモツ

日照(ひて)らえなエがらモグラモツみだえだ 奴(やづ)だ。

室(うち)にバッカリ居(い)で。(ツ・づぢは半濁音?)以下半濁

音?は『半』の印のみを付す

蜘蛛 三 クボ

虫のクボのみでなく、三百代言の一名をクボさいふ。尤も虫の

クボさいふ三百代言のクボさいふは、アクセントが異つて居るかも知れぬ。

蟻 三 アリ

丁斑魚 四 メグラザッコ

御飯(オマ)、ソガエこぼして食(く)うド メグラザッコになん

ぞ。(グ・ド半)

蠅螂 四 エポボツ

エポボツかま首立(グびた)デミ來ダ。(ツ・グ・デ・ダ半)

エポボツ腹立(はらた)つた／＼。

蝸牛の唄 二四

カサツブリ／＼角(つ)だせ槍(やり)だせ、槍だせ角だせ。

カサツブリかも知れぬ。(ツ半)

カサツブリは 笠(かき)ツブレ の訛かと思つて居つた。

蝸牛の黒焼は婦人の病によいさいふて食ふ人もある。

伯母 三六

オバの音は自分の伯母様をいふ時さ、自分の妹をいふ時さのアクセントは異つて居るやうだ。また娼妓の一名になつて居るから此時は、前二者さも又アクセントが異つて居るやうにも思はれる。

オバチャのチャは尊稱で、様の事であるから、伯母サンにも相手の妹サンにも使ふ。但し鶴岡ではサンさいふ事よりハンさいふ事が多く使ひ、酒田港ではサンを使ふ。(伯父様はガンチャさいふてオヂサンさいふ事はないやうだつた)。

尙ほ第三者の妹、及び目下の妹をオバコさいふ、コは軽い尊